

中国・四国インデックス ファンド (愛称:未来への架け橋)

追加型投信／国内／株式／インデックス型

償還交付運用報告書

第10期(償還日2016年5月25日)

作成対象期間(2015年5月26日～2016年5月25日)

第10期末(2016年5月25日)	
償還価額	9,485円72銭
純資産総額	707百万円
第10期	
騰落率	△22.2%
分配金(税込み)合計	－円

(注) 騰落率は分配金(税込み)を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、小数点以下第2位を四捨五入して表示しております。

(注) 純資産総額の単位未満は切捨てて表示しております。

- 交付運用報告書は、運用報告書に記載すべき事項のうち重要なものを記載した書面です。その他の内容については、運用報告書(全体版)に記載しております。
- 当ファンドは、投資信託約款において運用報告書(全体版)に記載すべき事項を、電磁的方法によりご提供することができる旨を定めております。運用報告書(全体版)は、野村アセットマネジメントのホームページで閲覧・ダウンロードしていただけます。
- 運用報告書(全体版)は、受益者の方からのご請求により交付されます。交付をご請求される方は、販売会社までお問い合わせください。

<運用報告書(全体版)の閲覧・ダウンロード方法>

右記ホームページを開く

⇒「ファンド検索」にファンド名を入力しファンドを選択

⇒ファンド詳細ページから「運用報告書(全体版)」を選択

受益者のみなさまへ

平素は格別のご愛顧を賜り、厚く御礼申し上げます。

当ファンドは、わが国の株式のうち、中国地方・四国地方で重要な活動を行っている企業の株式を主要投資対象とし、野村證券株式会社の金融工学等研究部門の発表する野村日本株地域別インデックスの中国・四国インデックスに連動する投資成果を目指すことで、信託財産の成長を目標に運用を行いました。

このたび、約款の規定にもとづき償還決算を行い、償還価額が決定いたしました。

ここに設定日から償還までの運用経過をご報告いたしますとともに、ご愛顧に対し厚く御礼申し上げます。

野村アセットマネジメント

東京都中央区日本橋1-12-1



サポートダイヤル 0120-753104

(受付時間) 営業日の午前9時～午後5時

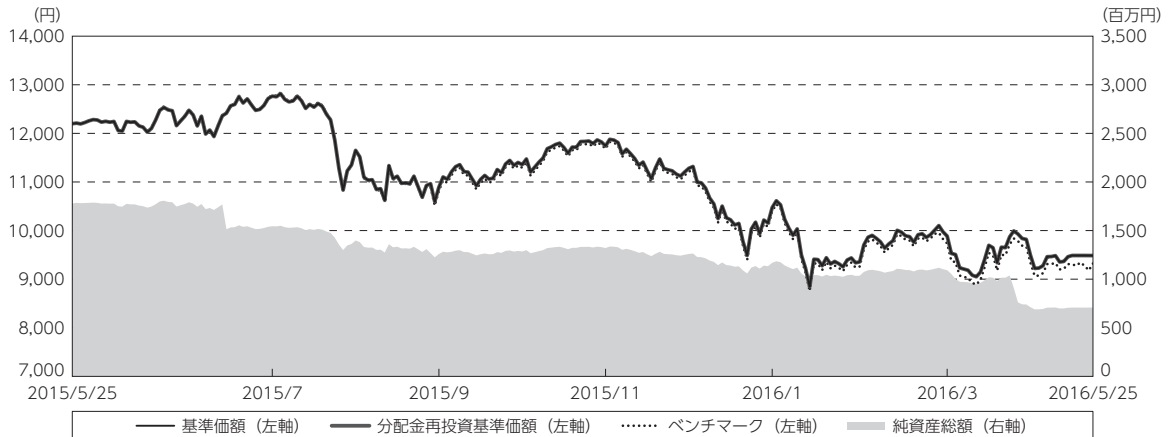


ホームページ <http://www.nomura-am.co.jp/>

運用経過

期中の基準価額等の推移

(2015年5月26日～2016年5月25日)



期 首： 12,199円

期末(償還日)：9,485円72銭 (既払分配金(税込み)：一円)

騰 落 率： △22.2% (分配金再投資ベース)

- (注) 分配金再投資基準価額は、分配金(税込み)を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、ファンド運用の実質的なパフォーマンスを示すものです。作成期首(2015年5月25日)の値が基準価額と同一となるように指数化しております。
- (注) 分配金を再投資するかどうかについてはお客様がご利用のコースにより異なり、また、ファンドの購入価額により課税条件も異なりますので、お客様の損益の状況を示すものではありません。
- (注) ベンチマークは、中国・四国インデックスです。詳細は3ページをご参照ください。ベンチマークは、作成期首(2015年5月25日)の値が基準価額と同一となるように計算しております。
- (注) 上記騰落率は、小数点以下第2位を四捨五入して表示しております。

○基準価額の主な変動要因

基準価額は、期首12,199円から期末9,485.72円に2,713.28円の値下がりになりました。

中国や新興国への景気減速懸念および原油価格下落などを背景とした世界的な株安や、為替が円高に進行したことなどを受けて、株式市場は下落しました。

1万口当たりの費用明細

(2015年5月26日～2016年5月25日)

項 目	当 期		項 目 の 概 要
	金 額	比 率	
(a) 信託報酬	円 108	% 0.972	(a) 信託報酬＝期中の平均基準価額×信託報酬率
(投信会社)	(45)	(0.405)	ファンドの運用とそれに伴う調査、受託会社への指図、法定書面等の作成、基準価額の算出等
(販売会社)	(57)	(0.513)	購入後の情報提供、運用報告書等各種書類の送付、口座内でのファンドの管理および事務手続き等
(受託会社)	(6)	(0.054)	ファンドの財産の保管・管理、委託会社からの指図の実行等
(b) 売買委託手数料	0	0.001	(b) 売買委託手数料＝期中の売買委託手数料÷期中の平均受益権口数 ※売買委託手数料は、有価証券等の売買の際、売買仲介人に支払う手数料
(株式)	(0)	(0.001)	
(c) その他費用	0	0.003	(c) その他費用＝期中のその他費用÷期中の平均受益権口数
(監査費用)	(0)	(0.003)	監査費用は、監査法人等に支払うファンドの監査に係る費用
合 計	108	0.976	
期中の平均基準価額は、11,117円です。			

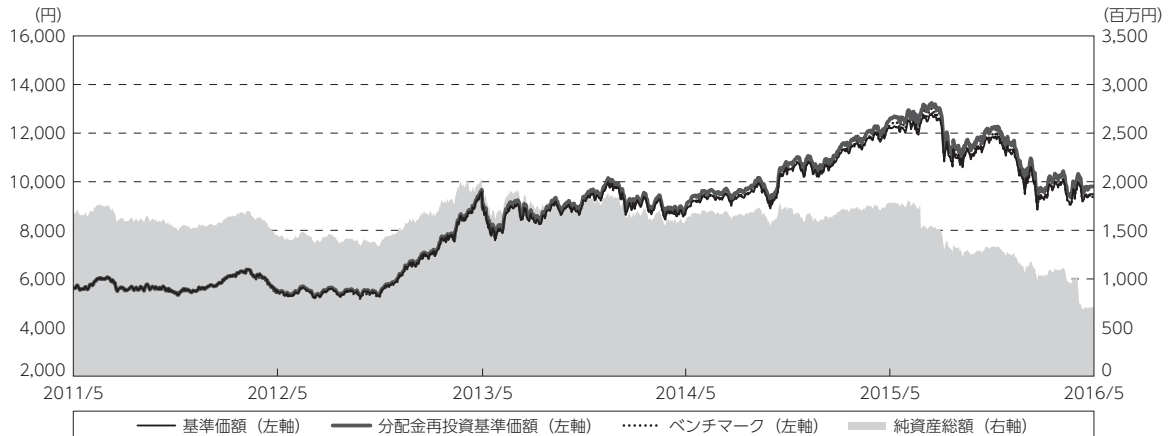
(注) 期中の費用（消費税等のかかるものは消費税等を含む）は、追加・解約により受益権口数に変動があるため、簡便法により算出した結果です。

(注) 各金額は項目ごとに円未満は四捨五入してあります。

(注) 各比率は1万口当たりのそれぞれの費用金額（円未満の端数を含む）を期中の平均基準価額で除して100を乗じたもので、項目ごとに小数第3位未満は四捨五入してあります。

最近5年間の基準価額等の推移

(2011年5月25日～2016年5月25日)



- (注) 分配金再投資基準価額は、分配金（税込み）を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、ファンド運用の実質的なパフォーマンスを示すものです。2011年5月25日の値が基準価額と同一となるように指数化しております。
- (注) 分配金を再投資するかどうかについてはお客様がご利用のコースにより異なり、また、ファンドの購入価額により課税条件も異なりますので、お客様の損益の状況を示すものではありません。
- (注) ベンチマークは、中国・四国インデックスです。詳細は以下をご参照ください。ベンチマークは、2011年5月25日の値が分配金再投資基準価額と同一となるように計算しております。

	2011年5月25日 決算日	2012年5月25日 決算日	2013年5月27日 決算日	2014年5月26日 決算日	2015年5月25日 決算日	2016年5月25日 償還日
基準価額 (円)	5,601	5,436	8,626	8,932	12,199	9,485.72
期間分配金合計 (税込み) (円)	—	45	80	50	120	—
分配金再投資基準価額騰落率 (%)	—	△ 2.1	60.2	4.1	37.9	△ 22.2
ベンチマーク騰落率 (%)	—	△ 3.6	60.6	3.4	38.1	△ 23.6
純資産総額 (百万円)	1,664	1,432	1,825	1,631	1,778	707

(注) 上記騰落率は、小数点以下第2位を四捨五入して表示しております。

(注) 純資産総額の単位未満は切捨てて表示しております。

(注) 騰落率は1年前の決算当日との比較です。

※「中国・四国インデックス」は、中国地方・四国地方（岡山県、広島県、山口県、島根県、鳥取県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県）を対象とした地域別インデックスで、「野村日本株地域別インデックス」のシリーズの一つです。

「野村日本株地域別インデックス」とは、野村証券株式会社の金融工学等研究部門が作成している株価指数で、日本の株式を本社の所在地及び生産・製造拠点の所在等の重要な活動を行っている地域に従って分類し、特定の都道府県を合わせた地域毎に計測する株価指数です。

※野村日本株地域別インデックスの知的財産権とその他一切の権利は野村証券株式会社に帰属しています。また、同社は当該指数の正確性、完全性、信頼性、有用性を保証するものではなく、ファンドの運用成果等に関して一切責任を負いません。

投資環境

(2015年5月26日～2016年5月25日)

期首から2015年8月中旬までは、米国の利上げに対する見方や、ギリシャの債務問題の進展状況、中国株式市場の急落などを巡り、株式市場は一進一退の展開となりました。

8月中旬以降は、中国や新興国への景気減速懸念が高まったことや、為替が円高に進行したことが企業収益への不安につながり、株式市場は下落しましたが、その後中国経済への懸念が後退したことや、ECB（欧州中央銀行）総裁の追加金融緩和を示唆する発言など世界的な金融緩和継続の流れや国内企業の決算への期待などが相場を押し上げました。

12月以降は、日銀金融政策決定会合の内容が金融緩和への手詰まり感の表れと受け取られたことや、中国経済への懸念が再び高まったこと、原油価格下落などを背景とした世界的な株安が進行したこと、為替が円高に進行したことなどを受けて、株式市場は下落しました。

2016年1月下旬には、日欧の中央銀行における金融緩和姿勢から反発に転じましたが、2月上旬には、米国経済の先行き懸念の高まりや、日銀によるマイナス金利導入の影響により金融機関の利益減少懸念が高まったことなどから、株式市場は再び下落しました。

当ファンドのポートフォリオ

(2015年5月26日～2016年5月25日)

・株式組入比率

株式の実質組入比率（先物を含む）は、期を通じ高位に維持しました。

・期中の主な動き

中国・四国インデックスの動きに連動した投資成果を目指すため、中国・四国インデックスに採用されている銘柄に幅広く分散投資し、随時銘柄見直し及び銘柄間の投資比率調整を行いました。

当ファンドのベンチマークとの差異

(2015年5月26日～2016年5月25日)

今期の基準価額の騰落率は-22.2%となり、ベンチマークである中国・四国インデックスの-23.6%を1.4ポイント上回りました。

主な差異要因は以下の通りです。

(プラス要因)

保有銘柄の配当権利落ちによりファンドには未収配当金が計上されたこと（特に2015年9月と2016年3月に大きく作用）

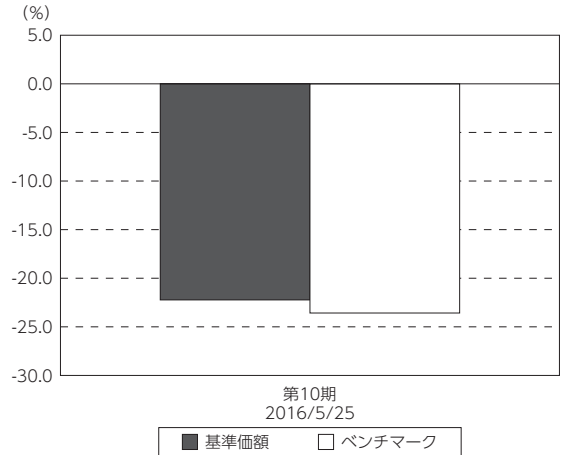
(マイナス要因)

ファンドでは信託報酬などのコスト負担が日々生じること

(その他、差異を生じた要因)

株式の組入比率が100%でないこと（市況の上昇時にはマイナスに、下落時にはプラスに作用）

基準価額とベンチマークの対比（期別騰落率）



(注) ベンチマークは、中国・四国インデックスです。

分配金

(2015年5月26日～2016年5月25日)

償還のため分配は行いませんでした。

設定来の運用経過

<設定来の基準価額の推移>



○基準価額の主な変動要因

基準価額は、設定時の10,000円が償還時9,485.72円となりました。設定来お支払した分配金は1万口当たり550円となりました。

第1期（2006年5月30日～2007年5月25日）

原油価格の高騰などを背景とした世界的な金融引き締めでリスクマネーの収縮の動きが広がったことから世界同時株安が進行しました。その後、原油価格の下落や米国の好調な企業業績を受けて、株式市場は上昇しました。しかし、中国株式相場の急落に端を発してリスク資産を圧縮する動きが広まり世界連鎖株安となったことや、一時円高が急速に進行したことなどから、株式市場は下落しました。

第2期（2007年5月26日～2008年5月26日）

米国のサブプライムローン(信用力の低い個人向け住宅融資)問題などから海外の株式相場が大幅に下落したことや、急速に円高が進行したことを受けて株式市場は下落しました。その後、日米欧の金融機関の業績下方修正などをきっかけにサブプライムローン問題が再燃し、世界的に株式相場が下落したことを背景に、さらに急激な円高となったことなどから景気や企業業績に対する懸念が強まった結果、株式市場は一層下落しました。

第3期（2008年5月27日～2009年5月25日）

原油高などによる世界的なインフレ懸念や内外景気の減速懸念が強まったこと、米大手証券会社の経営破綻などから米金融危機の様相が強まったこと、投資家の資金引き上げにより急激な円高が進んだことなどを受け株式市場は下落しました。その後、欧米の主要中央銀行が利下げに踏み切り米国株式市場が上昇したことや、日銀による利下げの観測が広がり金融政策の効果への期待が高まったこと、各国の景気対策や米大手銀行への大規模な救済策の発表により金融危機への不安が幾分和らいだことなどを受けて、株式市場は上昇しました。

第4期（2009年5月26日～2010年5月25日）

市場の予想を上回る主要企業の決算結果を受け、景気回復への期待感が再び強まったことや、政府が追加経済対策の大枠を固め日銀が新たな資金供給策を導入し投資家心理が好転したことなどから、株式市場は上昇に転じました。その後、中国の金融引き締め観測や欧州の財政不安を背景にリスク資産からの回避志向が強まったことなどから、株式市場は下落しました。

第5期（2010年5月26日～2011年5月25日）

米国で発表された経済指標が市場予想を下回り、円高傾向が継続し輸出関連企業を中心に業績悪化懸念が高まったことやユーロ圏周辺国の財政不安を背景に景気減速懸念が高まったことなどにより、株式市場は下落しました。その後、米連邦準備制度理事会（FRB）による追加金融緩和策が好感されたことや、予想を上回る米国経済指標発表による米国景気回復期待から輸出関連企業の良好な業績が見込まれたことなどから、株式市場は上昇しました。しかし、中東・北アフリカ情勢の緊迫化や東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故などを背景に投資家がリスク資産から資金を引き上げる姿勢を強めたことなどから、株式市場は下落に転じました。

第6期（2011年5月26日～2012年5月25日）

ギリシャ議会での財政緊縮策の可決を受け、欧州債務問題への過度な警戒感が後退し投資家心理が好転したものの、タイの洪水被害や円高の継続による輸出関連企業の業績悪化懸念が強まり、株式市場は一進一退の展開となりました。その後、日米欧の6中央銀行が市場へのドル資金供給を拡充するための協調対応策で合意したことに伴い欧州債務問題に対する警戒感が後退したことや、世界的に良好な経済指標の発表が相次いだこと、日銀による追加金融緩和の決定を受けて円安が進行し輸出関連企業の業績改善期待が高まったことなどを背景に、株式市場は上昇しました。その後、米国の経済指標が雇用回復ペースの鈍化を示したこと、中国経済成長の減速への懸念や欧州債務問題の再燃などを背景に、株式市場は下落に転じました。

第7期（2012年5月26日～2013年5月27日）

ギリシャ再選挙での財政緊縮派の勝利、ユーロ圏・欧州連合（EU）首脳会議での銀行監督を一元化する方針や経営不振の銀行に対して資本を直接注入する枠組みなどでの合意を受けて、欧州危機への警戒感が後退し、株式市場は上昇しました。その後、自由民主党が衆議院選挙で勝利し、脱デフレーション政策や円安進行から業績回復期待が高まったことに加え、日銀が打ち出した「量的・質的金融緩和」が事前予想を上回る規模だったことや為替が1ドル＝100円を超える円安に進んだことなどを背景に、株式市場は上昇しました。

第8期（2013年5月28日～2014年5月26日）

中国の一部の銀行における資金繰り懸念に対する過度な警戒ムードが和らいだこと、米国によるシリアへの軍事介入が回避されたこと、2020年夏季五輪東京開催決定による経済効果への期待が高まったこと、米国の経済指標が概ね堅調だったこと、為替が円安に推移したことで国内輸出関連企業を中心に業績上振れ期待が高まったことなどを背景に株式市場は上昇しました。その後、アルゼンチンペソ為替相場の急落を契機に新興国経済への警戒感が広まり世界的に株安となったことや、日銀の金融政策決定会合で金融政策の現状維持が決定され追加緩和期待が後退したことなどを背景に、株式市場は下落しました。

第9期（2014年5月27日～2015年5月25日）

期首から2014年9月末にかけては、中国の景気指標の改善や米国株式市場の上昇などを好感したこと、政府の成長戦略への期待感が広がったことなどから、株式市場は上昇しました。10月上旬に世界景気の先行き不透明感や米国内でのエボラ出血熱の感染拡大が懸念されたことから一時下落する局面があったものの、同月末に日銀が追加金融緩和を決定したことから、株式市場は再び上昇しました。2015年に入っ

ても、ECB（欧州中央銀行）の量的緩和導入や米国の早期利上げ観測の後退、国内景気の回復や企業業績の拡大期待から、株式市場は引き続き上昇しました。

第10期（2015年5月26日～2016年5月25日）

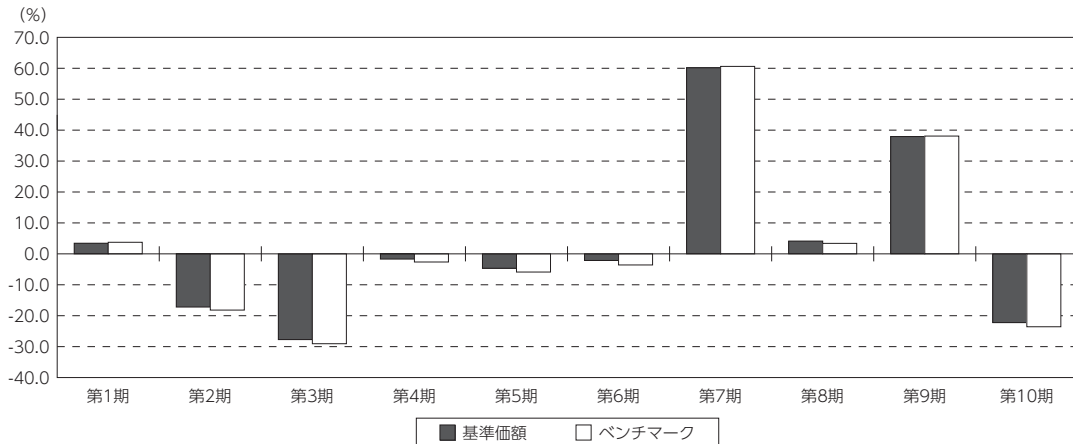
期首から2015年8月中旬までは、米国の利上げに対する見方や、ギリシャの債務問題の進展状況、中国株式市場の急落などを巡り、株式市場は一進一退の展開となりました。8月中旬以降は、中国や新興国への景気減速懸念が高まったことや、為替が円高に進行したことが企業収益への不安につながり、株式市場は下落しましたが、中国経済への懸念が後退したことや、ECB（欧州中央銀行）総裁の追加金融緩和を示唆する発言など世界的な金融緩和継続の流れや国内企業の決算への期待などが相場を押し上げました。12月以降は、日銀金融政策決定会合の内容が金融緩和への手詰まり感の表れと受け取られたことや、中国経済への懸念が再び高まったこと、原油価格下落などを背景とした世界的な株安が進行したこと、為替が円高に進行したことなどを受けて、株式市場は下落しました。2016年1月下旬には、日欧の中央銀行における金融緩和姿勢から反発に転じましたが、2月上旬には、米国経済の先行き懸念の高まりや、日銀によるマイナス金利導入の影響により金融機関の利益減少懸念が高まったことなどから、株式市場は再び下落しました。

○ベンチマーク（中国・四国インデックス）との対比

設定来では、ベンチマークが-6.9%となったのに対し、基準価額の騰落率*は+1.5%となりました。各期におけるベンチマークと基準価額の騰落率は次のようになっております。

*基準価額の騰落率は、分配金（税込み）を再投資して算出しております。

＜基準価額とベンチマークの騰落率の対比＞



(注) 基準価額の騰落率は分配金込みです。

(注) ベンチマークは、中国・四国インデックスです。

(主なプラス要因)

保有銘柄の配当権利落ちによりファンドには未収配当金が計上されたこと

(主なマイナス要因)

ファンドでは信託報酬などのコスト負担が日々生じること

(その他、差異を生じた要因)

株式の組入比率が100%でないこと（市況の上昇時にはマイナスに、下落時にはプラスに作用）

お知らせ

有価証券の指図範囲に新投資口予約権証券を加える必要の約款変更を行いました。

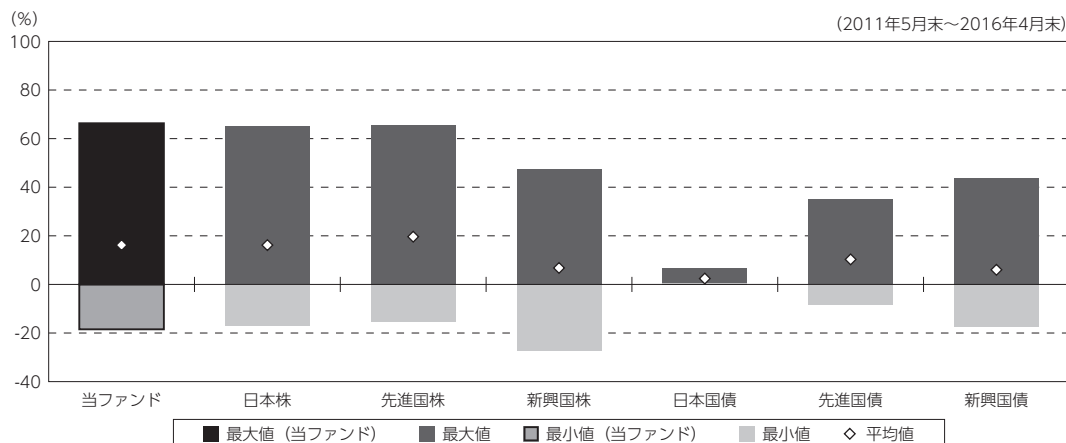
<変更適用日：2015年8月3日>

当ファンドの概要

商品分類	追加型投信／国内／株式／インデックス型
信託期間	2006年5月30日から2016年5月25日までです。
運用方針	野村證券株式会社の金融工学等研究部門の発表する野村日本株地域別インデックスの中国・四国インデックスに連動する投資成果を目指すことで、信託財産の成長を目標に運用を行うことを基本とします。 株式の組入比率は、高位を基本とします。非株式割合（株式以外の資産への投資割合）は、原則として信託財産総額の50%以下とすることを基本とします。
主要投資対象	わが国の株式のうち、中国地方・四国地方（岡山県、広島県、山口県、島根県、鳥取県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県）で重要な活動を行っている企業の株式を主要投資対象とします。
運用方法	わが国の株式のうち、中国地方・四国地方で重要な活動を行っている企業の株式を主要投資対象とし、野村證券株式会社の金融工学等研究部門の発表する野村日本株地域別インデックスの中国・四国インデックスに連動する投資成果を目指すことで、信託財産の成長を目標に運用を行うことを基本とします。
分配方針	毎決算時に、原則として配当等収益等を中心に分配を行うことを基本とします。ただし、基準価額水準等によっては、売買益等が中心となる場合があります。 留保益の運用については、特に制限を設けず、元本部分と同一の運用を行います。

(参考情報)

○当ファンドと代表的な資産クラスとの騰落率の比較



(単位:%)

	当ファンド	日本株	先進国株	新興国株	日本国債	先進国債	新興国債
最大値	66.3	65.0	65.7	47.4	6.7	34.9	43.7
最小値	△ 18.5	△ 17.0	△ 15.6	△ 27.4	0.4	△ 8.6	△ 17.4
平均値	16.2	16.1	19.5	6.8	2.5	10.3	6.0

(注) 全ての資産クラスが当ファンドの投資対象とは限りません。

(注) 2011年5月から2016年4月の5年間の各月末における1年間の騰落率の最大値・最小値・平均値を表示したものです。

(注) 決算日に対応した数値とは異なります。

(注) 当ファンドは分配金再投資基準価額の騰落率です。

《代表的な資産クラスの指数》

日本株：東証株価指数 (TOPIX) (配当込み)

先進国株：MSCI-KOKUSAI 指数 (配当込み、円ベース)

新興国株：MSCI エマージング・マーケット・インデックス (配当込み、円ベース)

日本国債：NOMURA-BPI 国債

先進国債：シティ世界国債インデックス (除く日本、ヘッジなし・円ベース)

新興国債：JPモルガン・ガバメント・ボンド・インデックス・エマージング・マーケット・グローバル・ディバーシファイド (円ベース)

※各指数についての説明は、後述の「代表的な資産クラスとの騰落率の比較に用いた指数について」をご参照ください。

(注) 海外の指数は、為替ヘッジなしによる投資を想定して、円換算しております。

当ファンドのデータ

組入資産の内容

(2016年5月25日現在)

2016年5月25日現在、有価証券等の組入れはございません。

純資産等

項 目	第10期末(償還日)
	2016年5月25日
純資産総額	707,622,765円
受益権総口数	745,987,529口
1万口当たり償還価額	9,485円72銭

(注) 期中における追加設定元本額は11,156,270円、同解約元本額は722,995,842円です。

<代表的な資産クラスとの騰落率の比較に用いた指数について>

○東証株価指数 (TOPIX) (配当込み)

東証株価指数 (TOPIX) (配当込み) は、株式会社東京証券取引所 (㈱東京証券取引所) の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など同指数に関するすべての権利は、(株)東京証券取引所が有しています。なお、本商品は、(株)東京証券取引所により提供、保証又は販売されるものではなく、(株)東京証券取引所は、ファンドの発行又は売買に起因するいかなる損害に対しても、責任を有しません。

○MSCI-KOKUSAI 指数 (配当込み、円ベース)

○MSCI エマージング・マーケット・インデックス (配当込み、円ベース)

MSCI-KOKUSAI 指数 (配当込み、円ベース)、MSCI エマージング・マーケット・インデックス (配当込み、円ベース) は、MSCI が開発した指数です。同指数に対する著作権、知的所有権その他一切の権利は MSCI に帰属します。また MSCI は、同指数の内容を変更する権利および公表を停止する権利を有しています。

○NOMURA-BPI 国債

NOMURA-BPI 国債の知的財産権は、野村證券株式会社に帰属します。なお、野村證券株式会社は、NOMURA-BPI 国債の正確性、完全性、信頼性、有用性を保証するものではなく、NOMURA-BPI 国債を用いて行われる野村アセットマネジメント株式会社の事業活動、サービスに関し一切責任を負いません。

○シティ世界国債インデックス (除く日本、ヘッジなし・円ベース)

「シティ世界国債インデックス (除く日本、ヘッジなし・円ベース)」は、Citigroup Index LLC が開発した日本を除く世界主要国の国債の総合投資収益を各市場の時価総額で加重平均した債券インデックスで、Citigroup Index LLC の知的財産であり、指数に関するすべての権利は、Citigroup Index LLC が有しています。

○JP モルガン・ガバメント・ボンド・インデックスーエマージング・マーケット・グローバル・ディバースファイド (円ベース)

「JP モルガン・ガバメント・ボンド・インデックスーエマージング・マーケット・グローバル・ディバースファイド (円ベース)」(ここでは「指数」とよびます) についてここに提供された情報は、指数のレベルも含め、但しそれに限定することなく、情報としてのみ使用されるものであり、金融商品の売買を勧誘、何らかの売買の公式なコンファメーション、或いは指数に関連する何らかの商品の価値や値段を決めるものでもありません。また、投資戦略や税金における会計アドバイスを法的に推奨するものでもありません。ここに含まれる市場価格、データ、その他の情報は確かなものと考えられますが、JPMorgan Chase & Co. 及びその子会社 (以下、JPM) がその完全性や正確性を保証するものではありません。含まれる情報は通知なしに変更されることがあります。過去のパフォーマンスは将来のリターンを示唆するものではありません。本資料に含まれる発行体の金融商品について、JPM やその従業員がロング・ショート両方を含めてポジションを持って、売買を行ったり、またはマーケットメイクを行ったりすることがあり、また、発行体の引受、プレースメント、エージェンシー、アドバイザー、または貸主になっている可能性もあります。

米国の J.P. Morgan Securities LLC (ここでは「JPMSLLC」と呼びます) (「指数スポンサー」) は、指数に関する証券、金融商品または取引 (ここでは「プロダクト」と呼びます) についての援助、保障または販売促進を行いません。証券或いは金融商品全般、或いは特にプロダクトへの投資の推奨について、また金融市場における投資機会を指数に連動させる或いはそれを目的とする推奨の可否について、指数スポンサーは一切の表明または保証、或いは伝達または示唆を行なうものではありません。指数スポンサーはプロダクトについての管理、マーケティング、トレーディングに関する義務または法的責任を負いません。指数は信用できると考えられる情報によって算出されていますが、その完全性や正確性、また指数に付随する情報について保証するものではありません。指数は指数スポンサーが保有する財産であり、その財産権はすべて指数スポンサーに帰属します。

JPMSLLC は NASD, NYSE, SIPC の会員です。JPMorgan は JP Morgan Chase Bank, NA, JPSI, J.P. Morgan Securities PLC., またはその関係会社が投資銀行業務を行う際に使用する名称です。

(出所：株式会社野村総合研究所、Citigroup Index LLC 他)